

---

# 西新宿アシッドハイスクール九々九九式

シラカベヒロ氏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西新宿アシッドハイスクール九々九九式

### 【Nコード】

N1908V

### 【作者名】

シラカベヒロ氏

### 【あらすじ】

西新宿のアシッドなハイスクールで九々と九九が。

『如何にして殺人鬼界は発展を遂げたか』。

まず大前提として、世間には殺人鬼がわんさかいるってことを覚えておいて欲しい。

これは僕の幼馴染であり現役殺人鬼の九流子流九くじゅうしゅうくがいつも言っていることだ。彼女は自称・未来の殺人鬼界を担う若きホープだそうで、そんなもん担ってどうするんだって思うけど、まあそれはそれとして。

子流九いわく、最近、殺人鬼界でもっぱら話題になっているのは『顔泥棒』だそうだ。どういう奴かっていうと、まあそのままなんだけど、女の子の顔の皮を剥ぎ取っちゃう、っていう。それで、『顔泥棒』。ちなみに女の子限定っていうのがポイント。

でも実はこの『顔泥棒』、殺人鬼ってカテゴリーに入れるかどうかはちょっと微妙で、殺人鬼界でもかなり物議を醸してるらしい。というのも、顔を盗られて結果的にショック死なり出血過多なり自殺なりで死ぬ人もいれば、死なない人もいるから。実際、僕の通う西新宿東高校にしんじゅくとうこう（ややこしい）にも四、五人、顔を盗られちゃった人がいるけど、死んだ人はいない。入院してる、もしくは顔中に包帯ぐるぐる巻きつけた状態で登校してる（なにもそこまでして学校来なくてもいいのに、よっぽど学校が好きなんだなー、と思う）で。

実は、『顔泥棒』のことは結構どうでもよかったりする。僕が話したいことはもっと別にある。

そもそも殺人鬼界ってなんだ。

いやもちろん広い世の中、色んな業界あることはわかる。僕自身、殺し屋っていうまあまあレア度の高い仕事をやっていて（中学二年のときからだから、もうかれこれ三年ほど身を置いてる）だから殺

し屋界ってものがあることを知っている。でも、それにしても、殺人鬼界ってなんだよ、と。だって殺人鬼って仕事じゃないじゃんか、と。

「界つつてもまあなに、そういうカチツとした業界的なのじゃなくて、もつと漠然とした、なんつーのかなあほら、例えるなら部が同好会か、みたいな。殺し屋界は部だけど、殺人鬼界はまだまだ同好会って感じつつーか、規模とか組織性が。わかる？　なんとなーくわかる？」

と、これは僕が訊いたときの子流九の回答。なんとなーく、わかった。

というわけで。

これから『如何にして殺人鬼界は発展を遂げたか』という話をする。いや別にしたくないんだけど、しなきゃいけない。する責任がある。

というのも実は僕　その発展にちよつと貢献しちやつた人物なのだ、不名誉ながら。

\* \* \*

がらがらつと扉を開けると、子流九が大きなポニーテールをゆさゆさ揺らしながら、制服（上）を半脱いでいた。具体的にいうと胸のちよつと上らへんまで脱いでる。ちなみにスカートは脱ぎきつてゐる、つまり履いてない。下着は上下黒。かなりふらふらした（頭と目が）。

「あ、ごめん」

咄嗟に謝る。そして大きく目をそらす。油断してた。着替え中とは思わなかった。……いや思わなかったっていうか、よくよく考えたらここ美術室だしそもそも着替え必要ないんだから着替え中だっと思って至るわけがない。えじゃあなんで脱いでんの？　混乱する僕。

「あーなんだ九々人<sup>くくと</sup>かー。いい気にしなくて。入れ入れー」

子流九はキヤーとかそういうガリーなりアクションはとらず、むしろ全てを受け入れながら半脱ぎ 全脱ぎ（制服をつて意味。ノット全裸）になった。えーなぜ。恐る恐る、目をそらしそらし、けど一応（なにが一応かわかんないけど）ちらちら見つつ、美術室に入り、後ろ手でゆっくり扉を閉める。

「でなに？ 告りにきた？ あたしがもうすぐ卒業するから？ ン？」

けらけら笑いながら子流九が机の上にがたと座る。僕は彼女の質問を完全にスルーしながらちよつと離れた椅子に座る。ぱつと見、美術室には僕と子流九の二人きり。

「あのー、先生は？」

「手<sup>てがみ</sup>上？ 手<sup>てがみ</sup>上は職員会議。でもさーあたし思っただけど、美術教師風情が職員会議でなに発言すんだろーね。絶対権力ないよねー先生というヒエラルキーにおいて美術教師風情。数学とか英語とかが総じて強いイメージあるよね、先生社会において。ね。ね？」

「え、うん、そうだね（後半聞いてなかったので適当な返事）」

「で、なに？ 告りにきた？ 告りにきたんだろ？ いいねいいねー、二月も終わりがけ、卒業を目前に控えたこの時期に？ 幼馴染であり部活の先輩であり美人で元気で気立てが良いこの九流子流九先輩に？ ずっと心の中にしまっていた大切な想いを？ 放課後の美術室というベストシチュエーションで？ ぶちまけちゃう？ かましちゃう？ いっちゃう？ きっちゃう？ おし、ほんとこい！」

「ズコー」

ズコーって口に出して言う人初めて見た。漫画太郎的。

「つーか」机から、たすんと飛び降りる子流九。「誰よーその気になってる奴って。あたしというものがありながらあー」

とかなんとか言いながら、すたすた僕の傍に歩いてくる。すたすた。僕は今世紀最大寝違えたみたいな角度になるまでぐぐぐいつと

首を曲げ、顔をそらした。

「あー……あのさ、というか子流九、服、着よう」

「D」

「は？」

「D」

「え、なにが」

「カップ。胸。これ。D」

「……あ、はあ、そう」

わー完全にワキ汗かいてる僕。そんなこと知るよしもなく、子流九はぐいぐい顔を近づけて喋りかけてくる（正直もうどれだけ目をそらしても視界の隅に黒い布地とふっくらしたDが見えてる）。

「で、あんた何しにきたの実際。あーってかあれか、普通に考えて部活しにきたのか。そうよねーあんた一応幽霊だけど美術部だもんね。よし、じゃあ描いてく？ あたしのヌード。せつかくだし。減るもんじゃなし。代金は千円でよし」

「（安いな）えっと僕、静物画専門だから遠慮します」

「あたしの裸はもはや静物の領域だろがーい」

ぱしんつ、と僕の頬を平手打ちし、げらげら笑う子流九。全然意味がわからないのでとりあえず無視して、打たれた頬を撫でながら話を切り出す。

「あー、えっとね子流九、そのー、単刀直入に言っと」

一呼吸おいて、声を潜めて。

「君を殺しにきたんだ僕」

数秒の沈黙。

見つめ合う僕と子流九。

ぷおーっ。

隣の音楽室から漏れ聞こえる、何やらラッパ的な音。

僕をまっすぐ見つめながら、子流九がゆっくり口を開く。

「……えー、普通すぎてクソつまんねえ」

うん。僕も正直、そう思ってた。

僕は殺し屋で、子流九は殺人鬼で。

殺人鬼っていうのは多かれ少なかれ誰かしらに（誰かしらっていうかまあ遺族とかに）恨みを買って生きてるわけで。

だから、殺し屋である僕に、彼女の殺害依頼が来たってなんらかしいことじゃないわけで。

それって総じて、なんだか普通だなあ、日常だなあって思う。

その日常的普通さ加減になんだか一気に全部冷めちゃったのかわからないけど、子流九は脱ぎ散らかした制服をさくさくつと着て、ざくざくつと机を四つ繋げて、その上にだらしなく寝転がり、

「よし、じゃあ殺せよお、あたしは逃げないぞお、おおい」

もうほんと気持ちこもってない感じでそんなことを言う。

「というか子流九なんで脱いでたの」

「あたしクリエイティブモード時はデフォルトでヌーディストビーチよ最近」

「（なに言ってるのかよくわかんないけど大体の予想で）つまりなんか作るうとしてたの」

「そ。それー」

ふいつと子流九が教室の真ん中らへんの机を指さす。机の上には、大きな銀色のボール（球じゃなくて料理とかで使うほう）が乗っている。席を立ち、近寄って中を覗き込んでみる。何やらネズミ色のしつとり湿った液体？ 固体？ がたつぷり入っていた。

「これ、粘土？」

「そ、ドンネー」

「なに子流九、陶芸とかやり始めたの」

「誰がやるかよジジイババアじゃあるまいし」

とっても偏見に満ちた考えだなーと思いはするけど口にはしない。子流九は寝っ転がったままべらべら喋る。

「そうでなくてさー手上がさ。なんか、顔型とりてえつつってんだ、顔型。そのドンネーにあたしが顔を突っ込んで、出来た型を飾りたいんだと。ゆくゆくは美術部の女子部員全員の顔型を飾りたいんだ

と。変わってんなーっつーか、美術教師らしいなーっつーか、あたしの顔って罪だなーっつーか、へへへ」

もちろん、顔型という言葉聞いた時点で僕はピーンときてる。ピーンときながらゆっくり考える。考えながら子流九に一つずつ尋ねてみる。

「身ノ坂先輩みのさかって、美術部だよな」

「ん、そうよ。あいつ先月から入院しちゃってさー、なんか顔大ケガしたとか言って、卒業制作完成せすじまいよ」

「齒島さんはしまって、美術部だよな」

「おう。つかあれ次期部長じゃんか。あーでもあいつも入院しちゃったよねー、なんか顔ケガしてすげえことなっちゃったらしいね。かわいそうにー」

「膝倉さんひざくらって、美術部だよな」

「膝倉ちゃんはお前、一年の中でもいつちばんいいよあれ。いやマジあたしが言うんだから間違いない。あたしあんまし人物画とかって好きくねえけどあの子が描いたのは別もんだわ。でもなー、あの子今あれじゃん、包帯ぐるぐるじゃん顔。あれ完治するかなー。あの子さ今、自画像描きかけなんだ、タイミング悪いことに」

「えーと、あと誰だ、あと二人ぐらいいたっけ。美術部兼顔負傷してる女の子」

「ん、どうかなーそうかなー」

「ちなみに子流九、念のため訊くけど、顔泥棒って知ってる？」

「は？ ふざけんなよお前知ってるわそんなもん。なに、あたしのことバカにしてる？」

「いや、ううん、してない。むしろ、すごいなあとさえ思ってる今、うん」

実際、これだけヒントただ漏れなのに気づかない子流九はちょっとすごいと思う。それはそれとして、どういう仕組みなのかなあと思ってた目の前、ボールの中に並々入ってるネズミ色の粘土をじっくり見てみる。妙にぬらぬらてかてかしている表面、に、そつと顔を



近づけてみる。つんと鼻を刺す強い強い刺激臭。シンナー系のおい。ああ、なるほど。もしかしてこのドンネー（感化された）、接着剤とか大量に混ぜ込んであるんじゃないかなあ、という考えに至る。多分あつてると思う。

「で九々人、あんた誰にあたし殺すよう依頼されたの」

「あのね子流九。殺し屋は絶対なにがあっても依頼人の名前は明かささないの。これ常識」

「二万でどう」

「膝倉さん」二万は魅力的すぎた。

「そっか膝倉ちゃんかあー……………えマジで」

がたんつと音を立てて子流九が起き上がる。まあそりや驚くかと、続けてもう一つ、がたんつと音がした。見ると、美術室の扉が開いていて、手上先生が帰ってきたのかと思ったら扉の向こうにいたのは先生じゃなく用務員さんだった。水色のつなぎを着て、右手に箸、左手に醤油の小瓶を持った、白髪頭で穏やかフェイスなおじさん。

「あー……………二人なんだ」用務員さんが誰に言うでもなく呟く。

「はあ、二人です」僕が返す。

「そっかあ……………じゃ、また後で来ます」お辞儀をする用務員さん。

がらがらつと扉が閉まる。数秒間の沈黙。

「……………九々人お」

「うん」

「今さあ、用務員のおっさんさ」

「うん」

「箸と醤油持ってたよね」

「うん、持ってたね」

「あれなに」

「さあ。晩ご飯食べるんじゃない」

でまた、数秒間の沈黙。

「なんの話してたんだっけあたしら」

「膝倉さんの話」

「うおそうだ！　なんであたし殺意買ってたんのそれ」

「いやーそこまではわかんないけど、殺しちゃったんじゃないの子流九、膝倉さんの親とか」

「いやいやいやそれはねーよ。今年入ってあたしまだガキ七人しか殺ってねーもん。……あ、もしかしたら膝倉ちゃん弟妹いんのかなえーどうかなーあたしあの子に嫌われんの結構つれーなあー」

うーんとかうあーとか言いながら机の上に寝そべり寝返りごろごろ脚をばたばたする子流九。

「子流九、えーと、スカートの中見えてる」

「いやさっきまでパンツ完全に見えてただろーが何を今さら。むしろ見る、目に刻め、そしてその記憶を今夜使え、使ってあたしに報告しろ」

とか非常にくだらないことを言いながら、子流九はげらげら笑う。うーん。子供ばかり七人殺すっていう残虐性、この目の前の姿からは全然想像つかない。でも「ほんとに殺したの？」とか訊こうもんなら「見る？」とか言って携帯に入ってる陰惨な事件現場の写メ複数枚を無理やり見せられることになる（高一のとき見せられた。五歳ぐらいの女の子の裂かれた真つ赤なおなかの中に綿がぎゅう詰めになってる写メ。タイトルはぬいぐるみ少女。楳津かずおライク）。ぼんやりと写メを思い出してうつすら吐き気を催していると。

ざっ、と何かが僕の髪を掠めた。液体的なもの。

えっ、とそれが通過したほうを振り返る。床を見る。

じゅ、という焼肉屋的な音と、焼肉的じゃない何かが焼ける匂い。あ、床、焦げてる。

振り返る。なにやら小さな茶色の小瓶（そういう童謡あったっけホッホーみたいな楽しげなやつ）を持っている。そしてにっこり満面の笑み。

「あの、今のなに」

「酸っ！」得意げに胸を張る子流九。

「え、なんで酸」

「え、殺ろうと思って」

「え、僕を」

「え、他に誰を」

「え、なんで急に」

「え、あたし殺人鬼なんだけど」

「え、知ってるけど」

「え、殺人鬼は急に殺してなんぼなんだけど」

「え、知ったこっちゃないけど」

「え、知つていて欲しいんだけど」

「え、わかった」

ふうと肩をすくめながら子流九は空になった茶色の小瓶を投げ捨て、脚を大きく広げてスカートの中、脚と脚との間にがばりと手を突っ込み、「あれーどこ行ったかなー、しまつていたはずなんだけどなー」とかぶつくさ言いながら、もぞもぞし始めた。相当はしたなくてだらしない格好。

「……僕、これ前から思ってたんだけどさ、子流九ってモテないでしょ、美人だけど」

「へへ、さんきゅー」

「いや前半に重きを置いて聞いて欲しかったんだけど」

「あつた！」

ひょいっとスカートから出した手には、また茶色の小瓶。

素早くその蓋を開け、ようとする子流九の手を掴、もうとする僕の手を子流九が足で払、おうとするその足をがちつと掴、むと今度は子流九が逆の足で僕の手を払、おうとするからそれをまた逆の手で掴む。

結果、子流九の両の足首を、両手でがっちりホールドしてる状態。見た感じマイルドな犬神家みたいになってる子流九は、両手こそ空いてるもののこの体勢じゃ僕に酸をかけれない。

「おい九々人、今この状況、どー見てもレイプ五秒前だぞー」

「見ようによつてはそうかも知れないねー」

「誰か来たらどうすんだよー」

「来るかなーそう都合よくー」「来るもんなんだよこういうときは

ー」そして僕らは沈黙する。

確かにそうだ、と思う。

大体こういうときは、本当に人が来る。それが人生だと思う。

静寂。

隣の音楽室から微かに漏れ聞こえる談笑。見詰め合う僕と子流九。

そしてまた静寂。

張り詰めた空気。

静寂。

空気。

がら。

「ほら来たあ！」

僕と子流九はハモリながら扉のほうを向いた。

「……いや来たけど、なにやってんだお前ら」

ぽかんと口を開けた手上先生が立っていた。

「レイプされそうなんです」と子流九。

「殺されそうなんです」と僕。

「美術室はそういうことする場所じゃないんだぞーお前ら」

まるつきりどうでもいい様子の手上。と、

「あああっ！」とんでもなく大きな声を出して、手上は例のボール

が乗った机にばたばた走り寄る。

「お前、九流、お前、顔型、顔型、顔型」

「あ、すんません。まだっす」

「あーああお前、もうこれ固まっちゃってる乾燥しきっちゃってる、

あーやり直しだお前、あああ、あああー、ああ」

もう誰がどの角度からどの部分をどう見てもやばい人物だとわかる嘆き方。文字通り頭を抱えて、ごすっごすっごすっごすっとおでこを何

度も机に打ち付ける手上先生。僕と子流九はそれをただただ呆然と見つめる。突然、バツと顔を上げこっちを見る手上。おでこ真っ赤。「九流、俺今から新しいの作ってくるからちよつと待っててくれるか。十分、いや五分でいい。待っててくれ。あと現まづ、お前帰れ邪魔だ」

えー。いや僕いたら計画進まないのはわかるけどそんな言い方ってあるか。普通にちよつと傷ついた。と、子流九が「はい」とのんきな返事。えー。ほんとに何もわかってないのか子流九。手上はうーんとかあーとかどこ置いたっけーとか言いながら戸棚から戸棚へ美術室内をうろろ。もう僕帰ろうかなほんとに。と。がらがらつ。

もう何度目かわからない扉の音。今日来客頻度すごいなと思いつながら、でももうなんかめんどくさくなつて扉のほうを見ない僕。子流九も見えてない。手上も見えてない。えー。誰か一人ぐらい見ようよ。しょうがないので僕が。しぶしぶ（ちなみにこの時点で僕はまだ子流九の両足をがっちり握ったまんま）扉のほうを見る。

用務員さんがぼつんと立っていた。箸と醤油の小瓶を持って。

「あれー……まだ二人かあ」残念そうに呟く用務員さん。

「あ、三人になりました。先生もいます」顎でくいつと手上を指す僕。

「ああ本当だ。うーん、そうかあ」床を見ながらしばらく何やら考え込んで「まあ、いいかあ」と一言、用務員さんがゆらーつと美術室に入ってくる。そしてゆらーつと僕らに近づき、「いただきます」と小さく小さく囁いて、箸を大きく振りかぶり、子流九の後頭部へ振り下ろ「ぶなっ！」危ないって言おうとして頭とお尻の音がかき消えた結果、木の名前みたいのを叫びながら、僕は握った子流九の両足を思いつき右にぶん回す。面舵いっぱいの。当然のように子流九は机から落ちてべつたんと床に落っこちる。「ギャ！」わー叩きつけられてギャ！　って言う人初めて見た。漫画太郎的。「なにすんだよ九々人！　顔が潰れんだろうが！」

その子流九の叫び声に、野生動物みたいな速度で手が反応を示す。

「なにやってんだ現！ 九流の顔を潰すな！ 九流の顔は俺のだろうが！」

えー。ついに言っちゃったこの人。ぽかんとする僕の目の前で今度は用務員さんが野生動物的俊敏な反応をする。

「九流さんの顔は、私のものです先生！ 私が醤油で頂くんです！」えー。思わぬ伏兵登場。手が顔を真っ赤にする。

「なに言ってるんですか！ あー、えーっと、えー名前」「遠藤です！」

「遠藤さん！ 九流の顔は私のものですよ！ これはもうずっと、もうずっと前から私が目をつけていて」

「そんなこと言うなら先生、私だっけずっと前から！ 子流九ちゃんが入学したときからですね先生」

「なにをちゃん付けで呼んでるんですか遠藤さん私の子流九に！」

「なにを呼び捨てにしてるんですか先生私のコルちゃんに！」

「コルちゃんとはなんですか教師ともあろうものが！」

「いいえ私はただの用務員ですしがない！」

もう僕はただ啞然とするだけで精一杯。床に転がる子流九を見ると、まんざらでもなさそうな顔（要は極上の笑顔）で二人の攻防をうっとり眺めていた。

「あたしモテるなやっぱ」

「子流九、とりあえずそろそろ気づこう」

\* \* \*

結論から言うと、『顔泥棒』は二人いたのだ。

身ノ坂先輩と齒島さんをやったのが手上先生。強力接着剤を練り込んだ粘土で顔型を取り、皮を剥ぎとっちゃう手口。

膝倉さんをやったのが用務員さん。手と箸で力任せにべりべり剥

ぎ取った顔の皮を醤油でぱくつと頂いちゃう手口。

ということで、二人とも間違はなく『顔泥棒』だった。

そして、お互いに相手を『顔泥棒』だと言い張った。

手上からすれば自分の獲物の顔を盗む用務員さんが『顔泥棒』。

用務員さんからすればその逆で、手上が『顔泥棒』というわけ。

「九々人おー」

「なに子流九」

「大人ってさ、なんか自分勝手だねー」

「あー、うん、僕もなんかそれちよっと思ってた」

言い争い、罵り合い、取っ組み合いする大人たちを、美術室の隅っこの机に並んで座り、ぼーっと眺める僕と子流九。もうだいぶ日が暮れてきた。窓から赤い赤い光が射し、二人の顔泥棒の顔を照らす。

「九々人、あんた父親いないんだっけ」

「え、そうだけど、なに急に」

「いやあたしさー、父さんと母さんがあんな感じでよく喧嘩してたのよ。なんか見てたら思い出しちゃった」

「……ああ、そう。離婚、したんだっけ？」

「そうそう十歳んとき。親権争いっつーの？　ちようどあんな感じでねー、あたしを取り合ってたねー。あー思い出しちった。はー、しかし大人ってエゴいよねー」

頭をむしゃむしゃ掻き、ポニーテールをぶるぶる揺らしながら、ぼんやり上、天井を眺める子流九。を、僕はじつと見てしまう。

「ん？　なんだよ」子流九が僕を見る。ちよっとなんか困ったような顔。

「ああ、いや別に」目をそらす。

へへっ、と小さく笑い、子流九が思いっきり僕のほっぺたをビンタする。「痛あつ！」「なに辛気くせえ顔してんだよー九々人。だいじょーぶよ別に、今でも父さん母さんどっちにも会ってっしあたし。てかお前の親父こそ行方不明じゃなか、お前の話のがよっぽど辛気くせーわ」けらけら笑う子流九。確かにそうだ。というか父さ

んは、僕が小一のときに失踪していなくなったので、法的には実は既に死亡扱いになってる、んだけど、まあそれ言っと本格的に湿っぽくなりそうなので言わないでおく。

泥棒泥棒と言い争いながら、用務員さんが箸を振りかぶり、手上先生が瓶入り接着剤を振り放ち迎え撃つ。僕らはプロレスの観客みたいな気分で、やれーそこだーとか囃し立てて笑う。

「でもさー九々人」

子流九が脚をぶらぶらさせながら言う。

「あたし思っただけどさ、やっぱなにどうしたって大人にはなっちゃうよね、あたしもあんたも。人間だもん。だったらさ、あたしらもさ、遠慮しねえでちゃんとエゴくなんなきゃすぐ殺されちゃうよね世界から。あんた殺し屋やってるじゃん。でも今あんた一人でやってるでしょ？ それ儲かんないし、危ないよね？ なんかあつても守ってくれる人誰もいねえじゃん。ハイリスクローリターン。これダメ。でもあたしもそう。殺人鬼は別仕事じゃねえけど、でもちよっとミスればあの二人みたいな衝突起こりうるじゃん。それダメよね。じゃあどうするか」

子流九が、びしつと僕の顔のど真ん中を指さす。

「これからの時代、アウトサイダーも組織化が必要ってことよ」

なるほど。さっぱりわからない（そもそもあんまりちゃんと聞いてなかった、父さんのこととか考えてた）ので、とりあえず曖昧に頷いておく。子流九はひょいっと机から降り、ぱんぱんっと手を叩いた。

「はいいやめやめ終わり終わり終わーってあれ？ 片付いてる？

もしかして」

見ると、手上先生と用務員さんが、強く強く握手を交わしていた。えースポ根的。

\* \* \*



三十分後。

日も暮れきつてもうすっかり夜。

手上先生と用務員さんはそれはそれはワクワクした顔で、子流九に手を振り振り、帰っていった。

「じゃあ九流よろしく。頑張ろうなー」

「はいこちらこそよろしくつす」

「コルちゃん、困ったことあったらなんでも言ってね、よろしくね」

「へへへ、さんきゅでーすよろしくー」

がらがらがらつ、かたん、と扉が閉まる。

久しぶりの静寂。

ふうーと息を吐き、子流九が大きく伸びをする。「っはあ。……

っわけで」くるつと僕のほうを向き、完全なキメ顔でVサインを見せる。

「本日、東京都殺人鬼協同組合を設立することとなりました」

「……あ、そう」

「先生らの力と知恵を借りながら、しっかりかつちり組織化して、あたしら殺人鬼の自由と権利を守りつつ、殺人鬼界の活性化と発展を目指したく思っております！」

「……あー、うんまあ、頑張つて」

もう全然子流九が言ってる意味はわかんなかったけど、でもこんなに自信とやる気に満ち満ちた顔見せられたら、僕は何も言えなかった。それでなんだか全然関係ないけど、あー子流九もうすぐ卒業しちゃうんだなあ、とぼんやり思った、なぜか。

「大学、美大行くんだっけ子流九」

「そつよ。あんたも来れば？」

「え、うーん。考えとく」

と言いながら、あ多分これ僕行くな子流九とおんなじ大学、とうつすら確信していた、なぜか。

「よーし帰る帰る、つてあーその前に」

子流九が鞆を肩に掛けながら僕をぎろつと見る。

「あんたが気になつてゐる奴つて誰よ」

「うわー結構それ気になつてゐるな子流丸、と思いながら、言おうか  
言つまいか二秒悩んで、

「膝倉さん」言っちゃった。

「えーマジか。なるー」ふむふむと頷く子流丸。

「うーんまあ、気になつてゐるっていうか、そこまでもないんだけど、実はえーっと、告白されちゃって、こないだバレンタインに。それで、少し、気になっちゃってるかもなー僕っていうかあれ？

子流丸もしかしてちよつと落ち込んでる？」俯く子流丸の顔を覗き込んでみる。

「わーお殺したいわーお前のその自意識」くすくす笑う子流丸。「あつ、つか膝倉ちゃん、あれじゃん。あたしの殺害依頼してきたんじゃないあんたにそういや」

あ、そうだ。僕もちよつと忘れてた。というか僕、子流丸殺しにきたんだつたそう言ええ。完全に忘れてた。今から済ませるか。いやでももうだるいか今日は。明日でいいか。というか、いつでもいいか。子流丸は、にまにましながら、なるほどねー、そういうことねー、だからあたしをねー、とかぶつぶつ言っている。まったくなんのことかわからない。僕はそれを尻目に、自分の鞆を持ち、肩に掛け、窓を閉め、カーテンを閉め、手際よく帰り支度を済ませて振り返り「子流丸、帰」ざつ。

何かが僕の髪を掠めた。液体的なもの。というか絶対、酸。

そして目の前には、小さな茶色の小瓶を高々と掲げた、笑顔の子流丸。

「殺人鬼界の発展を祈って、かんぱーい」  
「はい乾杯」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1908v/>

---

西新宿アシッドハイスクール九々九九式

2011年7月26日03時40分発行